



マラカ物語

立 本 成 文*

え、マラカ？ 魔羅化？ また新しい造語ですかと聞かれそうな、何となく淫靡な響きもするこの語は、実はマラッカのつもりなのである。インド洋と南シナ海とを結ぶ、古来から東西交易の通路であったあのマラッカ海峡のマラッカである。実はマラカという書き方を私は1976年から一貫して使い、最近の東南アジア研究センター編の『事典 東南アジア 風土・生態・環境』でも、ペナン、モルッカのようにマラッカがすでに日本語として慣用化され、マラカでは落ち着かないという意見にもかかわらず、採用してもらっている。しかし、百科事典をはじめ他の東南アジア関係の事典ではすべてマラッカである。

地名の表記というのはなかなか厄介なものである。厄介さを回避するひとつの方法として、表記に現地語による原音主義を取る場合が多い。「現地」で統一された表記がなされていけば問題はないが、エスニシティ、エスノ・ナショナリズムの錯綜するところではどの表記を現地語としてとるかが問題となる。例えば、インドネシアの東部にウジュンパンダンと言う都市がある。植民地下のオランダ時代にはマカッサル(Makassar)と呼ばれていた。ウジュンパンダンかマカッサルかという選択の問題はさておいて、マカッサルという言葉に注目してみよう。これはインドネシア語の表記による正式名である。インドネシア語では二重子音はなじまないにも拘らず、土地の言葉に似せるということで促音になっている。土地の言語はインドネシア語化された形でいえば「マカッサル」語か「ブギス」語である。マカッサル語ではマンカサラットとでも書けるような発音であるが、

外部の人々はマカッサルと聞きとり、それが標準語としてのインドネシア語に定着したのである。日本語ではもちろんマカッサル語ではなく標準インドネシア語を採用してそれが「現地」の発音であるとする。もっとも、マカッサルという日本語のカタカナ表記は、インドネシア語を移したという意味で、最後の子音のrをル(ru)としていることを除いて、まことに正しいのである。促音もその通りである。しかしマラッカの促音はそうではない。

日本語でもイギリスというように人のことは言えないが、日本のことを英語ではジャパンという。マラカは英語でMalaccaと書く。マラヤ、マレーシアという言葉がマレー語のMelayu(マラユ、ムラユ)から作られたように、マラカもマレー語のMelakaを英語風に表記したものである。そのMalaccaの発音は、発音記号によれば、[mələkə]である。そこには決して促音は入っていないはずである。他のヨーロッパ諸語でもマラッカと詰まって発音しているところはない。ちなみにボブソン・ジョブソンの例に取り上げられている16,17世紀のつづりはCがひとつである。マラッカというのは、日本人の耳には促音のように聞こえ、促音を入れて気張って発音するほうが原音に近いと思っているからであろうか。マラッカという書き方が日本で定着したのはおそらく英語のつづりに子音のcが二つあることにもよるかもしれない。しかし二重子音というつづりに引きずられたばかりではなさそうである。バターなどのように外国語を日本語にする時には不必要な促音を入れる例が多い。あるいはアクセント・強調を示すために促音にすることも考えられる。それとも、やたらと気張って促音にしたがるのは、日本語の促音の特殊性という以外に、外国の言葉であるというのを強調するためなのかとも思う。

* Narifumi Maeda Tachimoto, 京都大学東南アジア研究センター；Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

それはインドネシア語を知らない人がマカン（食べる）をわざわざマッカンと気張って表記するのと同じ心理かもしれない。この場合はアクセントまで間違っただけ移しているのではあるが。

日本の地図帳の中には、原音主義をとって、Melaka の最初の e は曖昧母音であるというので、ムラカと表記しているものもある。この表記も首尾一貫しているといえない。マレー語では最後にくる母音の a は曖昧母音として発音される。したがって、最初のムと最後のカとは、つづりは違うが母音の発音は同じなのである。ムラカという表記は、最初は発音に、最後はつづりに従っていることになる。首尾一貫した表記にしようとするとムラクと書くか、マラカと書くのが正しい。二つのうちムラクというのはやや原音から離れ過ぎるので、マラカが妥当なのである。

最近フランスのペルラスが『ブギス人』という英語の本の中で Malaka, Malayu と表記していた。現在のポルトガルの学者も Malaca あるいは Malaka と使っている。昔は Malaka のつづりももっと普通であったのかもしれない。

地名表記には、「現地」での原音の確定、その原音がどう発音されるか、それを外国人がどう聞き取るか、そして音韻体系の異なる外国語でどう表記するか、その地名の表記は違う言葉の中でどんな位置を占めるのかという知識が必要になる。このように見てくると、地名をどう書くかという単純なことにも、当然のことではあるが、地域研究の基本的な態度が問われていることに気付く。地域研究の対象をいかに見、聞き、それに何らかの解釈・批判を加味して、どのように他の人に話

すか、書き留めるか。外国を研究対象にしている場合の地域研究者の直面する問題そのものである。一つには、曖昧母音の例のように、現実態をどれだけ「正しく」捉えるかということ。あるいはどれだけ深く理解するかということかもしれない。二つには、「マラッカ」のように、自分の中に巣くう固定観念との闘い。これは慣用とはいったい何なのかという問題も含む。三つには、日本語としての自然さ、少しでも現実態に近く、しかもみんなに受け入れられるような美しい表現。いくら「現地」語で正しい発音であるといっても、日本語でなければならない。日本語になる運命を持っている。しかし促音の入ったマラッカがこの要件に基づいたものであるとは思わない。単なる惰性に過ぎないのである。三つの基準のどれが正しいというのではない。時には相矛盾する要請をどういう風にバランスを取るかということが大切である。

バンコック、フィリピンと表記されていたのが最近ではすっかり影をひそめ、バンコク、フィリピンに統一されてきている。なぜマラカはマラッカのままなのだろうか。気張ったマラッカが私は美しいとは思わないが、なかにはマラッカの方がマラカよりきれいだという人もいる。なぜそうなのか。なぜ日本人は、息を詰めて、発音の流れを止めてしまう促音（詰まる音）にそんなに執着するのだろうか。

それにしても、生半可な情報に基づく理論化だけは避けたいというのが、マラカの表記方法をめぐって思うことである。